View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

宣教のわざとしてのＪ．ウェスレーの霊性について[1]

趙　　永哲

はじめに

18 世紀に起こったメソジスト運動の主人公である J. ウェスレーは、優れた神学者[2] であると同時に福音を宣べ伝えるため全生涯をささげた伝道者である。ところが、これまでウェスレーに関する研究は神学者として歴史神学や組織神学の立場から主に理論的なものに留まり、宣教に関わる実践的なアプローチは少ない傾向がある。伝道者としてのウェスレーを探求する研究はまた少なく、宣教に関する充分な分析がなされてないのが事実である。1905 年リチャード・グリーンが著した『伝道者ジョン・ウェスレー』[3] はウェスレーの伝道の生涯 50 年を年代的に考察したことに過ぎないし、1967 年スケヴィントン・ウードはその著書『燃える心－伝道者ジョン・ウェスレー』[4] でウェスレーの伝道についてテーマ別に区分して述べているものの、宣教のわざについて分析的な研究が行われたとは言えない。そして、1971 年にアウトラーが著した『ウェスレーアンの精神における伝道』[5] は、実際のウェスレーによる宣教のわざよりは現代における福音宣教をウェスレーの神学的な立場で、要約しているのに留まっている[6]。そして、比較的に最新の研究としてはジェームズ・C・ローガンが編集した『ウェスレーアン遺産における神学と伝道』[7] があり、それは現代の諸学者たちが様々な立場でウェスレーアン伝統の福音宣教について著したものである。ところが、そこにはウェスレーの宣教の根源とも言える霊性についての言及はあまり見当たらない。さらに、その他、ウェスレーに関する多くの文献には彼の宣教思想に注

（１）本論文は、日本基督教学会近畿支部会（2010 年 3 月 25 日、神戸松蔭女子学院大学）において発表され、『神学研究』の掲載のため、多少の加筆訂正が加えられている。
（２）代表的なウェスレー神学者であったアウトラーは、ウェスレーを「文化神学者」（a theologian of culture）あるいは「民衆神学者」（a folk theologian）として呼んでいる。Albert C. Outler ed., *John Wesley*, New York : Oxford University Press, 1964, p.119. Albert C. Outler, *Theology in the Wesleyan Spirit*, Nashville: Tidings, 1975.p.3. 等を参照。
（３）Green, Richard, *John Wesley : Evangelist*, London : The Religious Track Society, 1905.
（４）Wood A. Skevington, *The Burning Heart : John Wesley, Evangelist*, Bethany Fellowship, 1967.
（５）Albert C. Outler, *Evangelism in the Wesleyan Spirit*, Nashville: Tidings, 1971.
（６）アウトラーの死後、ウェスレーの精神における福音伝道（*Evangelism in the Wesleyan Spirit*）と神学（*Theology in the Wesleyan Spirit*）についての二つの本は一冊にまとめられ、合本の形で再発刊される。Albert C. Outler, *Evangelism & Theology in the Wesleyan Spirit*, Nashville: Discipleship Resources, 1996.
（７）James C. Logan (ed)., *Theology and Evangelism in the Wesleyan Heritage*, Nashville: Abingdon Press, 1994.

目しているものが少ない。それにも関わらず、ウェスレーの深い霊性による宣教のわざとその中に秘められた宣教思想は決して無視することが出来ない。

ウェスレーとメソジストの霊性について論じる際、様々な立場が存在する。特に、本論文の関心事は、ウェスレーの中心思想の一つである「救いの確証」を中心に聖霊の働きや救いの確信を強調する信仰更新運動的な側面、言わば福音宣教のわざとしてのウェスレーの霊性についてである。

今回の論文は、これまでの J. ウェスレーの霊性（spirituality）についての研究と彼が生涯かけて行なった伝道（Evangelism）あるいは宣教（mission)、この二つのキーワードを中心に 18 世紀ウェスレーの霊性が単に個人的・内的なレベルに留まったのではなく、小グループ運動を通して、社会と世界への広がりを持つ宣教的な側面があったことを考察していくことである。言い換えれば、この論文の目的はウェスレーの霊性が個人の救いに留まらないで、宣教のわざとして社会的霊性にまで広がるものであったことを実践神学的な立場から明らかにすることである。

Ｉ．ウェスレー霊性の形成背景

ウェスレーの霊性と宣教思想を理解するためには、まず 18 世紀の英国社会や教会の背景について考察する必要がある。基本的にウェスレーが生きていた 18 世紀は哲学的には理性の時代であり、社会的には産業及び農業革命の時代でもあった。また、宗教的にはドイツを中心に起こった敬虔主義[(8)] 運動がある。ウェスレーの神学及び宣教思想に与えた影響については、「エキュメニカルなウェスレー」[(9)] と呼ばれるほど幅広い背景を持っていたが、ここではウェスレーの霊性と宣教思想において最も大きな影響を与えたと言えるドイツ敬虔主義について考察していくことにする。

17 世紀に起こったキリスト教の信仰更新運動として、18 世紀ヨーロッパ大陸で開花した敬虔主義運動がある。この運動は、宗教改革以後に現れたプロテスタント運動としては大きな動きであった。主にドイツを中心に展開された敬虔主義運動が、18 世紀に生きたウェスレーにも影響を与えたのはよく知られている事実である。このこ

（８）敬虔主義については、Carter Lindberg ed., *The Pietist Theologians*, Blackwell, 2005. M. シュミット著・小林謙一訳、『ドイツ敬虔主義』、教文館、1992 年、デイル・ブラウン著・梅田與四男訳、『敬虔主義：そのルーツからの新しい発見』、キリスト新聞社、2006 年などを参照。

（９）これに関しては、Newton, *The Ecumenical Wesley,* The Ecumenical Review 24 (April 1972), pp.160-175, Donald A.D. Thorsen, *The Wesleyan quadrilateral*, Grand Rapids, Mich. : Zondervan Pub. House, 1990（特に、78-81 頁に著者はウェスレーの精神を Catholic Spirit, Theological Liberality/Toleration, Ecumenical Character などに表現している)。また、清水光雄『ウェスレーの救済論：西方と東方キリスト教思想の統合』、教文館、2002 年の第 5 章（エキュメニカルな神学者ウェスレー、161-206 頁)、拙稿「J. ウェスレーにおける宣教理解の一考察」、関西学院大学大学院神学研究科修士学位論文、2002 年、1 章 3 節：エキュメニカル背景などを参照。

とについて、セルはその著書『J. ウェスレーの再発見』[10] の中で、ウェスレーによる信仰更新運動の原動力が敬虔主義であったことを明らかにしている。

「J. ウェスレーは教理的であり、実践的なキリスト教の新しい体系を作り出した。…ウェスレーにとってその原動力は、ドイツ敬虔主義に由来している。その敬虔主義とは、ルター信仰の最も不可欠なものであり、宗教改革の原動力の継承であった。」[11]

ウェスレーの霊性に影響を与えたドイツ敬虔主義の背景には次のようなものがある。

まず、敬虔主義の創始者とも言えるシュペーナー（Philipp Jakop Spener, 1635-1705）は、宗教改革以後 17 世紀プロテスタント正統主義がスコラ主義の影響を受けて、より教条主義的になっている事に問題点を覚え、心から体験する信仰の熱情を慕うようになった。シュペーナーは言わば「教会内の小さな教会」（ecclesiola in ecclesia : Collegia Pietatis）運動を展開したのである。シュペーナーの「教会内の小さな教会」運動が、後にウェスレーによってホーリクラブ（Holy club）という形で、オックスフォード大学キャンパスで始められ、アルダスゲイトにて 1738 年 5 月 24 日、モラビア派の集会での聖霊体験を通し、本格的に英国を動かすメソジスト運動として展開されるようになる。

次に、J. ウェスレーが自分の神学を形成し、初期メソジスト復興運動を展開する上で、決定的な影響を与えたのは、アウグスト・フランケ（August Hermann Francke, 1663-1727）であった。彼は敬虔主義大学のハレ（Halle an der Saale）大学を中心に教育や社会福祉、宣教などを通してウェスレーに影響を与えるようになる。ウェスレーがドイツの敬虔主義に接する契機となったのは、主にハレ敬虔主義の書籍からである。具体的には、ウェスレー以前の時代である 1698 年当時イギリス国教会（以下、国教会）の聖職者であるトマス・ブレイ（Thomas Bray、1656-1730）によって文書宣教を目指す「キリスト教知識普及協会」（the Society for Promoting Christian Knowledge, SPCK）が創立された。ハレのフランケは、1700 年に SPCK の通信会員となり、ウェスレーも 1732 年この団体の会員となると同時に SPCK から出版された書物を購入することになる[12]。その後、トマス・ブレイの尽力により植民地における国教会のミニストリーを支援するために聖職者や学校教師を派遣する団体として「海外福音伝道会」（The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG）の創設を認める国王ウィリアム 3 世の勅許が 1701 年に発布された。実際、ウェスレーが 1735 年出発

（10）George Croft Cell, *The Rediscovery of John Wesley*, New York : Henry Holt and Company, 1935.
（11）Ibid., p.142
（12）John Wesley, ed by F. Baker, *The Works of John Wesley* (以下、BE), vol.25 Letters I, 1980, Oxford : Clarendon Press, p.443, 注 1 を参照。

するジョージア宣教も、SPG から宣教師として派遣されたのである[13]。ハレの敬虔主義者フランケが、ウェスレーに与えた宣教の影響関係は、いわゆる「デンマーク・ハレ・ミッション」（Denish Halle Mission）から始まる。すなわち、SPG 創設に動かされたデンマーク王フレデリック 4 世が南インドの植民地トランケバール（Tranquebar）への宣教師派遣を計画し、ハレの敬虔主義者フランケに接触するようになる。この要請を応えて、フランケは 1705 年 2 人のドイツ人、すなわちバルトロメウス・ツィーゲンバルク（Barthomäus Ziegenbalg, 1683-1719）とハインリヒ・プリュチャウ（Heinrich Plütschau, 1678-1747）がトランケバールへ派遣するようになる[14]。彼らは宣教地でタミル人のために働き、ツィーゲンバルクは新約聖書をタミル語に翻訳するが、これが最初のインド語新約聖書であった。そこで彼らは自分たちの宣教の働きと様子を手紙で送った。そのものが宣教報告書としてまとめられ、作成されたのが『東方における福音伝道』[15] である。ウェスレーは幼い時、母親がこの宣教報告書を読み、どれほど深い感動を受け、子どもの教育の指針として用いたことを自分の日誌において明らかにしている[16]。それによると、彼女は宣教師たちの報告書を読んで、神の栄光のための真の情熱に霊感を受け、これまでとは違うように生きることを決心した。彼女は宣教師たちの生き方を通して、自分の生活と子どもたちの教育方法論を習得したのである。ウェスレーの自己統制と几帳面な生活、そして宣教的な使命感は、これに由来していると言える。ウェスレー自身も宣教師として派遣される以前も、宣教地ジョージアにおいてもこの報告書を読んでいた[17]。このように考える時、敬虔生活及び宣教の面においてウェスレーはフランケの影響を受けたのは間違いではないであろう。

さらに、一歩進めて、ドイツ敬虔主義の中でウェスレーに直接影響を与えたのは、ツィンツェンドルフ（Nikolas Ludwig Zinzendorf、1700-1760）[18] の率いるモラビア派

（13）これに関しては Hunsicker, David., John Wesley: Father of Today's Small Group Concept?, *Wesleyan Theological Journal*, v.31, no.1, Spring, 1996, p.196 の注を参照。

（14）David J. Bosch, *Transforming Mission-paradigm Shifts in Theology of Mission*, New York : Orbis Book, 1991, p.252-255. 宮本憲、「モラヴィア派とその海外宣教事業－近代プロテスタント宣教運動の起源に関する一考察－」『キリスト教論藻』、vol.41、神戸松蔭女子学院大学キリスト教文化研究所、2010 年、55 項。

（15）Propagation of the Gospel in the East : Being an Account of the Success of Two Danish Missionaries.　これの原題は Merkwürdige Nachricht aus Ost-Indien である。ここではこの書物だけ紹介したが、実際ウェスレーがハレの敬虔主義に影響されたものにはそれ以外にも August Hermann Francke, *Nicodemus : Or, A. Treatise against the Fear of Men*, trans. by A.W. Böhme, London, 1706. August Hermann Francke, *Pietas Hallensis*, trans. by A.W. Böhme, London, 1707. などがある。

（16）BE, vol.19 Journal and Diaries, p.285.

（17）BE, vol.18 Journal and Diaries, p.489.

（18）Nikolas Ludwig Zinzendorf（1700-1760）、モラビア派のヘルンフート兄弟団の創立者、ハレの A・H・フランケの学校に学ぶ。合理主義やプロテスタント正統主義に反対して〈心の宗教〉を主張した。今日もヘルンフート兄弟団によって毎年編集されている『日々の聖句』（Losungen）－ 2001 年（271 版）―の成立に寄与した。参考、宮田光雄『御言葉はわたしの道の光―ローズンゲン物語』、新教出版社、1998 年。

の運動であった。ツインツェンドルフは敬虔主義運動が活発であったドレスデン（Dresden）で生まれたが、驚くことに彼の父はシュペーナーの友人であった。モラビア派神学の背景は、基本的に M. ルターの信仰義認の神学とアウグスブルク信仰告白を受け入れた敬虔主義である。モラビア派は本格的な海外宣教運動へと発展させたものであり[19]、実際ウェスレーがモラビア派と初めて出会ったのも彼らが海外福音宣教のため 1735 年 10 月 21 日にアメリカ大陸に向けて出航したシモンズ（Simmonds）号の船上であった。このような出会いにより、ウェスレーはこのモラビア派から大きな影響を受けるようになる[20]。とりわけ、モラビア派にとって、宣教とは教会ではなく真にキリストに生かされた個々人から成る「教会内の小さな教会」が担う自発的なものであった[21]。ウェスレーはアメリカから戻って来てからも彼らの信仰的な勧めに従い、特にモラビア派の集いであるアルダスゲイトの集会に参加し、ある青年がルターの『ローマ書序文』を読むのを聞きながら、「自分の心が不思議に温まるのを感じる」[22] 回心を経験したのであった。しかし、ウェスレーはモラビア派敬虔主義から多くの影響を受けながらも、彼らの静寂主義（Stillness）や道徳廃棄論（Antinominianism）、万人救済論、そして完全な神聖さに対しての否認などの論争や葛藤が原因で、結局は別れるようになる。

このようなウェスレーの宣教中心の霊性は、主にシュペーナー、フランケ、ツィンツェンドルフなどによって受け継がれたドイツ敬虔主義から影響されたものであり、とりわけシュペーナーの「教会内の小さな教会」はウェスレーの霊性と宣教思想に多大な影響を与えた。ウェスレーはその後、シュペーナーやツィンツェンドルフなどのドイツ敬虔主義とは異なった方向を歩んで行くことになる。彼はモラビア派に深い尊敬の念と、自分の信仰に対する彼らの大きな影響への感謝の念を持ちつつも、ウェスレーの冷静な目は否応なしにモラビアニズムの現実を批判し、自分の道を歩いて行かざるを得ないその独特な道を追うことが出来たのである[23]。

以上のことを通して私たちはウェスレーがシュペーナー、フランケ、ツィンツェンドルフなどによるルター神学的な敬虔主義の影響を受けながらも、彼の独自的な方法で発展させて行ったことが分かる。

---

(19) これについては、注 14 の宮本憲「モラヴィア派とその海外宣教事業－近代プロテスタント宣教運動の起源に関する一考察－」を参照。

(20) ウェスレーがモラビア派に影響を受けたことに関しては、Clifford W. Towlson, *Moravian and Methodist*, London : The Epworth Press, 1957 を参照。

(21) 宣教学者ボッシュは敬虔主義者が「自発性の原理」（principle of voluntarism）を宣教に導入したと指摘している。David J. Bosch, op.cit., p.253.

(22) BE, vol.18, p.250.（'I felt my heart strangely warmed'）

(23) 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』、日本基督教団出版局、1975 年、152 頁。

Ⅱ．ウェスレーの霊性[24]

ウェスレーによるメソジストの霊性は、内的（inward）要素と外的（outward）要素に分けることが出来る[25]。内的霊性はキリスト者の純粋な愛によってキリストにおける神との親密な内的合一（inner union with God）を意味する敬虔であり、外的霊性は他者のための愛（隣人愛）を指す社会的なものである[26]。

1. 内的な心の霊性

ウェスレーの初期霊性に大きく影響を与えたのは、ジェレミー・テイラー（Jeremy Taylor, 1613-1669）とドイツの神秘思想家トマス・ア・ケンピス（Thomas á Kempis,1380-1471）、そしてウイリアム・ロー（William Law, 1686-1761）である[27]。

まず、1725 年[28] ウェスレーは 23 歳の時、主教ジェレミー・テイラーの著書『聖なる生活と死に至る規則や訓練』を読み、大きな感動を受ける。特に、彼が強調する「意図の純粋さ」（purity of intention）を通してウェスレーは刺激され、その書物を読み、即座に自分の生涯を、すなわちすべての自分の考え、言葉、行動を神に献身する決心をする[29]。それでこれを「第 1 の回心」[30] あるいは「オックスフォードの回心」と呼ぶ。このようなテイラーはウェスレーの内的な心の霊性に大きな影響を与える

（24）ウェスレーの霊性についての基本的な文献は、John Wesley, *A Plain Account of Christian Perfection*, London : Epworth press, 1952 (1987printing) (以下、Plain Account), Robin Maas, Wesleyan Spirituality, in Robin Maas and Gabriel O'Donnell eds., *Spiritual Traditions for the Contemporary Church*, Abingdon Press/Nashville, 1990, pp.303-319., Frank Whaling ed., The Classics of Western Spirituality, *John and Charles Wesley*: Selected Writings and Hymns, New York : Paulist, 1981., David Lowes Watson, Methodist Spirituality, Kenneth J. Collins ed., *Exploring Christian Spirituality*, Baker Books, 2000、拙稿「ウェスレーの小グループにおけるメソジストの霊性について」『ウェスレー・メソジスト研究』、日本ウェスレー・メソジスト学会、教文館、2007 年、81-101 頁、拙稿「J. ウェスレーの霊性とリーダーシップについて」―小グループ組織を中心に―、『神学研究』（57 号）、関西学院大学神学研究会、2010 年、125-137 頁などがある。

（25）Frank Whaling ed., The Classics of Western Spirituality, *John and Charles Wesley*: op.cit., p.13.

（26）Ibid., p.64.

（27）*Plain Account*, pp.5-6.

（28）ところが、この時期に関してはウェスレー自身の表現さえ一貫性がない。例えば、ウェスレーは自分の回心日であった 1738 年 5 月 24 日の日記において、1725 年 22 歳の時、トマス・ア・ケンピスの著書を読み、感動を受けたと記し BE, vol.18 (Journal and diaries), p.243., Wesley. John, W. Reginald Ward, Richard P. Heitzenrater eds., Nashville : Abingdon, 1988、後の著作『キリスト者の完全に関する平易な解説』では 1726 年に読んだと記述している（*Plain Account*, p.5）。
また、日記にはテイラーについての言及がないが、*Plain Account* ではテイラーの本をア・ケンピスより一年前に読んだと記している。この件に関して、私はウェスレーの若い時の状況を比較的に詳しく描いているラック（Rack）の見解、すなわち 1725 年 5 月にはア・ケンピスの書物を、そして同年 6 月にはテイラーの書物を、さらにローの書物は 1730 年末読んだという考えに従う（Henry D. Rack, *Reasonable enthusiast : John Wesley and the rise of Methodism*, London: Epworth Press, 1989, p.73）。

（29）*Plain Account*, p.5.

（30）ウェスレーの回心に関しては、1725 年に起こった第一の回心（Maximin Piette, John Todd 等が強調）と 1738 年起こった第二の回心、言わばアルダスゲイトの福音的回心があるが、ここでは前者のことを指している（野呂芳男『ジョン・ウェスレーの生涯と思想』、日本基督教団出版局、1975 年、2 ～ 3 章、または藤本満『ウェスレーの神学』、福音文書刊行会、1990 年、17 頁。特に、注を参照）。

が、それは「聖性（holiness）を追求する霊性」であった。

次に、1726 年[31] ウェスレーはトマス・ア・ケンピスの著書『キリスト者の模範』[32] に出会い、以前は経験したことのない「内的な宗教」（inward religion）、すなわち「心の宗教」（the religion of the heart）の本性と範囲を光のように強く体験する。それ故、自分の全生涯を神に献身するようになる。

その後、1730 年頃、ウェスレーはウイリアム・ローの著書『キリスト者の完全』と『真剣な招き』[33] に出会う。これらの書物との出会いによって、ウェスレーは魂と体全体で献身し、そしてすべての持ち物を神にささげる決心をする[34]。

ウェスレーによる内的な心の霊性とは、意図の純粋さ、心の宗教、完全な献身などを意味する内的な聖性（inward holiness）であり、それは神に向かう私たちの愛として何よりも神を愛し、神の愛に留まることである。

ウェスレーの内的な心の霊性が形成されたこの時期、彼の思想は基本的にドイツの敬虔主義を背景に自分が属していた国教会に従って敬虔的な完全と初代教会的な神秘主義[35] を追求したと言えるであろう。しかし、彼の霊性はこのような内的な霊性に留まらず、1738 年の福音的な回心[36] 後には、その霊性を宣教のわざとして当時の社会に疎外されていた人々に適用していったのである。

2. 外的な社会的霊性[37]

ウェスレーにおける社会的霊性の背景について語る時、ローマ・カトリックやプロテスタントなどの西方の伝統は個人的なデボーションの立場であったが、彼が属して

---

(31) この年についてもいろいろな見解があるが（注 28 を参照）、ここでは *A Plain Account of Christian Perfection* に従って記す。

(32) ウェスレー自身はこれを *A Plain Account of Christian Perfection* の中で『キリスト者の規範』（Christian's Pattern）と表現しているが、実際にこれは『キリストに倣いて』（Imitation of Christ）を指すことである。

(33) これらの完全なタイトルは、『キリスト者の完全に関する実践的論文』（A Practical Treatise upon Christian Perfection, 1726）と『敬虔なきよき生への真剣な招き』（A Serious Call to a Devout and Holy Life, 1729）であった。ウェスレーとローの関係についてより包括的な論議のためには、J. Brazier Green, *John Wesley and William Low*, London : Epworth Press, 1956 を参照。

(34) *Plain Account*, p.6.　ところが、実際ウェスレーはローの影響を強調しなかった。それは彼が多様な書物を読み、また実際的な面あるいは行動を強調したゆえ極端的な神秘主義に陥らなかったからである。1738 年 5 月という大切な時にウイリアム・ローと手紙をやり取りしたことについては、Telford. John ed., *The letters of the Rev. John Wesley,* Standard edition, vol. I, London : The Epworth Press, 1931, pp.238-244 を参照。

(35) ウェスレーと神秘主義との関係については、Robert G. Tuttle, Mysticism in the Wesleyan Tradition, Zondervan Publishing House : Francis Asbury Press, 1989 を参照。

(36) これは回心に関しては、1738 年起こった第一の回心、言わばアルダスゲイトの福音的回心を指す（注 30 を参照）。

(37) 拙稿「J. ウェスレーの社会的霊性に関する一考察」、『神学研究』（52 号）、関西学院大学神学研究会、2005 年、195-205 頁を参照。

いた国教会の霊性[38]は、既に社会的な特質を持っていた[39]。すなわち、国教会の霊性は、基本的に宗教改革後の西欧キリスト教、つまりローマ・カトリックやプロテスタントのように「精神的な祈り」が中心となる個人的あるいは主観的なものではなく、教会の典礼的な礼拝であり、狭い意味での社会的、つまり共同体的なものであった[40]。さらに、国教会の霊性は共同体の聖礼典的であり、その中心は祈祷書であるが、ここでの祈祷書とは神の民の共同的な生き方についてのものである[41]。

私たちはウェスレーの外的な社会的霊性の思想を多くの場面で見ることが出来るが、とりわけウェスレーは 1744 年の説教「聖書的キリスト教」の中で、聖書的キリスト教が「先ず個人のうちに存在し始め、次に相互の間に広がり行き、さらに地上を覆いつつある」[42]と主張している。これは、真の聖書的キリスト教が個人に留まらず、社会的に展開していくことを示すことであろう。また、ウェスレーは自分の霊性の要約とも言える『キリスト者の完全に関する平易な解説』の中で、神の愛と共に隣人に対する社会的な愛を強調している。また、彼の説教「主の山上の垂訓」（1748 年）においても、「キリスト教が本質的に社会的な宗教であり、したがって、それを孤立した宗教に代えることは、それを破壊することに他ならない」[43]と、社会的な面が力説されている。つまり、ウェスレーにとって信仰の本質が個人的であり、内的であれば、信仰の証拠は公けのものであり、社会的である[44]。ここで、ウェスレーによる外的な社会的霊性は外的な聖性（outward holiness）として、具体的には隣人に向かう私たちの持続的な愛である。アウトラーによれば、このようなウェスレーの福音伝道を「健全な伝道」（healthy evangelism）として呼んでいる[45]。

このように考える時、ウェスレーの社会的霊性は個人と共に社会全体が神を霊的に体験し、神の像を回復することであり、私たちは神と隣人愛を実践しながら福音の社会的使命を持つことになる。つまり、ウェスレーの社会的霊性はこの世を神の国へと変えていく福音宣教の使命を呼び起こすことであり、これこそウェスレーの外的な社会的霊性の重要な特徴と言えるであろう。

---

(38) イギリス国教会に関する霊性については、William J. Wolf, ed., *Anglican Spirituality*, Morehouse-Barlow Co, 1982.（W.J. ウルフ編・西原廉太訳『聖公会の中心』聖公会出版、1995 年）そして H.R.McADOO, *Anglican Heritage* : Theology and Spirituality, Canterbury press, 1997., John N. Wall, Anglican Spirituality, in Robin Maas and Gabriel O'Donnell eds., *Spiritual Traditions for the Contemporary Church*, Abingdon Press/ Nashville, 1990, pp.269-286 などがある。

(39) Harvey H. Guthrie, Anglican Spirituality, William J. Wolf, ed., *Anglican Spirituality*, p.12.

(40) Ibid., p.5.

(41) Ibid., pp.5-11.

(42) BE, vol.1,pp.161-180.

(43) BE, vol.1,p.533.

(44) Albert C. Outler, *Evangelism & Theology in the Wesleyan Spirit*, op.cit.,p.22.

(45) Ibid., p.28.

3. ウェスレー霊性の核心：確証の教理とキリスト者の完全

私たちがウェスレーの霊性を理解するためにはその聖霊論[46] について注目する必要がある。ウェスレーにとって救済の問題は究極の教理的、実践的な関心事であり、聖霊はその要となる原理である[47]。また、ウェスレーの思想的な核心は、C. ウイリアムズが述べているように、キリストが現に「聖霊によって私たちの生活の中に変革をもたらし、教会を通して私たちに聖霊の一致を与え、この世においては聖霊の実である愛の服従を要求しながら絶えずこれを変革しておられる」[48] という確信の中に見出される。

ウェスレーの霊性の核心として救いの確証、聖霊の証しについての「確証の教理」[49] に最も大きな影響を与えたのは、ドイツ敬虔主義を受け継ぐモラビア派のピーター・ベーラー（Peter Böhler）であった。ウェスレーによる救いの確証の大切な出来事であったアルダスゲイト体験は、まさにピーター・ベーラーの影響の下で起こったものであった[50]。

実際に、ウェスレーが確証の教理を基礎として作った説教は三つある。それらは、説教 10 番「御霊の証しⅠ」（1746 年）、説教 11 番「御霊の証しⅡ」（1767 年）、説教 12 番「私たち自身の霊の証し」（1746 年）である[51]。確証の教理を説明するためにウェスレーが説教 10 番と 11 番の中で用いた聖書の箇所はローマの信徒への手紙 8：16 であるが、これはメソジスト・リバイバル運動を生み出した、極めて宣教的な共同の証しについての教えである。ここで共同の証しとは、神の霊の証しが私たちの霊の証しと共に証しをする、という形である。この場合、ウェスレーは神の霊の証しを義認的性格を持つ「直接的証し」に、私たちの霊の証しを「間接的な証し」と呼んでいた[52]。ウェスレーにとって確証の教理である聖霊の証しは、信仰によって救いが与えられることに対する証拠であり、聖霊の内的証しを通して私たちに救いの確証を与えられるものであった。私たちは聖書に基づき、聖霊によって示され、神の愛を宣

---

(46) ウェスレーの聖霊論に関する書物としては［L.M. Starkey, *The Work of the Holy Spirit – A Study in Wesleyan Theology,* New York : Abingdon Press, 1962. L・M・スターキ（著）、山内一郎・清水光雄（訳）『ウェスレーの聖霊の神学』、ウェスレー著作集刊行会、1985 年。］を参照。この本は今までのウェスレー聖霊論に関する最も包括的かつ重要な著作として評価されている。

(47) L・M・スターキ（著）、前掲書、47 頁。

(48) Williams W. Colin, *John Wesley's theology today,* Nashville : Abingdon Press,　1960,p.200.

(49) ウェスレーの確証の教理に関しては、中村謙一、「ジョン・ウェスレーの確証の教理についての一考察」『ウェスレー・メソジスト研究』vol.7、教文館、2006 年、97-121 頁を参照。

(50) M. シュミット著・小林謙一訳、『ドイツ敬虔主義』、18-19 項。また、中村謙一は「ジョン・ウェスレーの確証の教理についての一考察」、105-109 項にウェスレーがアルダスゲイト体験以前までピーター・ベーラーによって 13 回ほど霊的な指導を受けたことをウェスレーの日誌に基づいて説明している。

(51) このようなウェスレーの説教の順番は、Albert C. Outler が編集した *The Works of John Wesley* (BE), vol.1, Sermon Ⅰ, Nashville : Abingdon Press,1984 に従う。

(52) L・M・スターキ（著）、前掲書、101-114 頁。

べ伝えていく救いの証しを持って宣教する大切さをこの確証の教理を通して学ぶことが出来るであろう。

また、ウェスレーにとって聖霊の目標は個人であれ、社会であれ、「完全な変形」(total transformation)」であった。それは堕落した人間が心も生活も聖なるものとなる言わば、「内的な完全（inward perfection)」と隣人愛に見られる外的な表現としてウェスレーが好んで用いていた「社会的な聖性（social holiness)」である[53]。ウェスレーが聖化の過程として用いた「キリスト者の完全」は、論争の余地があるものの、ウェスレーにとって「完全」はジェレミ・テイラーやウイリアム・ローの思想から学び取った、言わば罪を憎み善行による愛として表現される絶対的な「意図の純粋さ」[54]、つまり神に向かう絶対的な献身を意味していたのである[55]。

ウェスレーが理解した完全は神に向かう「意図の純粋さ」であり、それは人間による努力の結果ではなく、神の豊かな賜物として「先行の恵み」である。すなわち、完全は私たちの中にある聖霊の働きなのである。この中でウェスレーが目指したキリスト者の完全は、ウェスレー霊性の核心である聖霊の働きであると同時に真理に従って熱心に求めるすべての人々が到達出来る「実践的な霊性」(practical spirituality)[56] であったと言える。その中でもウェスレー霊性の強味は、先行の恵みによる聖霊の働きの普遍性であり、それはキリスト教意外の宗教や理性の立場にも救いの可能性を開いている[57]。特に、ウェスレーによるこのような聖霊の働きの普遍性の強調は今日における教会の宣教課題に多大な示唆を与えているのである。

従って、ウェスレー霊性の核心である確証の教理とキリスト者の完全は神を愛すると同時に隣人を愛する宣教と繋がり、このような霊性こそ宣教のための実践的な霊性（practical spirituality）と言えよう。言い換えれば、ウェスレーにとって霊性とは、個人や社会全体が神を霊的に体験し、この世を神の国に変えて行く福音の社会的な使命を持つ社会的霊性、すなわち「宣教のための霊性」(spirituality for mission）なのである。

Ⅲ．実践的な宣教のわざとしてのウェスレーの霊性

実際、ウェスレーの霊性は内的な（inward）要素として敬虔生活、意図の純粋さ、内的な心の宗教など、また外的な（outward）要素としては社会的霊性に大きく分けられるが、この二つは互いに異なる別のものではなく、宣教のために一つとなったも

（53）Robin Maas, op. cit., p.310-311.
（54）*Plain Account*, p.5.
（55）Robin Maas, op.cit., pp.311-312.
（56）Robin Maas, op.cit., p.312.
（57）L・M・スターキ（著)、前掲書、257-258 頁。

のである。アウトラーは内的な聖性（inward holiness）と外的な聖性（outward holiness）は一つの「統合された聖性」（whole-i-ness）になるべきであることを主張する[58]。ウェスレーにとって内的聖性と外的聖性の相互関係性は明らかである。ウェスレーは自分の説教の中でおよそ 50 のところで自分の霊性の大事なキーワードである「聖なる生活」、「聖性」（holiness）、「聖化」、「キリスト者の完全」などについて次のように要約している。

「では、宗教とは何か？私たちが神の御言葉を見れば、答えは簡単である。聖書によれば、それは一つの基準による。それは、愛、それ以下でも以上でもなく、愛である。愛は律法の完成であり、掟の目的である。それは神と隣人、すなわち天の下にあるすべての人を愛することである。」[59]

このようにウェスレーにおいて実践的な宣教の霊性の動機となるのは、愛、すなわち神を愛し、隣人を愛することである。ウェスレーが実際宣教のわざとして体験し、行ったウェスレーの霊性の具体的な中身は、アルダスゲイト街の福音的な回心[60]（1738 年 5 月 24 日）と実際に宣教のため生涯をかけて献身した野外説教、そして世界を自分の教区として見た（I look upon all the world as my parish）彼の宣教思想等がある。

1. アルダスゲイトにおける福音的な回心

ウェスレーの生涯を見ると、特に彼の福音的な回心と言われるアルダスゲイトの体験（1738 年 5 月 24 日）がオックスフォードの学者であったウェスレーを情熱的な福音伝道者にさせるきっかけとなったことが分かる。つまり、ウェスレーはアルダスゲイトにおいて「心が不思議に温まる」信仰体験をし、福音と救いに対する確信を持つようになった。ウェスレーが福音的な回心を体験した 1738 年 5 月 24 日の日誌に次のように記している。

「私は自分の心が不思議に温まるのを感じた[61]。私は救われるためにキリストに、ただキリストのみに信頼したことを知った。そしてキリストが確かにこの私の罪を取り除き、私を罪と死の律法から救い出して下さったという確信が与えられた。」[62]

このようなウェスレーの福音的な確信はこれまで自分の宣教のメッセージを変えるきっかけとなる。

ウェスレーは自分の宣教の働きを 4 期に分けて説明したことがある。つまり、第 1

（58）Albert C. Outler, *Evangelism & Theology in the Wesleyan Spirit*, op.cit.,p.128.
（59）BE, vol. 3, Sermon 84: The important question,p.189.
（60）ウェスレーの回心は、注 30 に書いてある通りに二つあるが、ここでは 1738 年起こった第二の回心、言わばアルダスゲイトの福音的回心を指している。
（61）'I felt my heart strangely warmed'
（62）BE, vol.18, p.249-250.

期は 1725-29 年、第 2 期は 1729-34 年、第 3 期は 1734-1738 年、そして第 4 期は福音的な回心があった 1738 年以後である。ウェスレーはアルダスゲイト街で回心を体験した 1738 年を基準にその以前は徹底的な教会生活をしながら一生懸命説教したが、これと言った伝道の実を結ぶことが出来なかったという。ところが、アルダスゲイトの福音的な回心以後、説教する度に初めから終わりまですべての説教をイエス・キリストに基づき、「神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と伝えたところ、刈り株（stubble）の中の火のように豊かな実を結ぶようになったと語っている[(63)]。

さらに、ウェスレーは燃える宣教への情熱を持って同労者たちに次のように勧めている。

「あなたは魂を救うこと以外に何をしてもいけません。あなたが好きな人だけでなく、好きではない人にも行くべきです。ここで大切なのはあなたがどれほどたくさんの説教をしたのか、あるいはあれこれのソサエティーに関心を持っていたのかではなく、出来る限りどれほどのたくさんの魂を救ったのか、ということです。なるべくたくさんの人々を連れて来て悔い改めさせるべきです。聖性がなければ彼らが主を見ることが出来ないので、あなたは全力を尽くして彼らをそのようにさせるべきです。」[(64)]

このようにオルダスゲイトにおいて福音的な回心を通して新たな福音と救いの確信を得たウェスレーの霊性はその後、力ある福音伝道者として個人の救いに留まらず、社会と民族を救おうとする実践的な霊性として豊かな宣教の実を結ぶことが出来たのである。

2. 野外説教

ウェスレーは優れた福音伝道者であると同時に優れた説教者でもあった。事実、彼は福音的な回心を体験する前である 1725-35 年の間、当時の英国国教会の聖職者の中で誰よりもたくさん説教をし、10 年の間 68 編の説教を書いた[(65)]。

ところが、ウェスレーの実質的な説教者としての生涯は、彼が回心してからほぼ 1 年後である 1739 年 4 月から始まる。それはホーリークラブの同僚であったホイットフィールドによって誘われ、4 月 2 日から行った野外説教[(66)]（伝道）である。ホイットフィールドは 21 歳の 1736 年に司祭となった雄弁な説教者であったが、国教会は彼

---

(63) Wesley. John (by), Thomas Jackson (ed.), *The Works of the Rev. John Wesley*, vol.8, London : Wesleyan Methodist Book Room, 1872 (Reprinted 1979 by Baker Book House Company), p.467-468.

(64) Ibid., p.310.

(65) ウェスレーは生涯たくさんの説教をしたが彼が文書で残した説教の数は 151 編に知られている。これらの説教はアウトラー（Albert C. Outler）を中心に編集、出版したアメリカのメソジスト教会の「200 周年記念 J. ウェスレー全集」（The Bicentennial Edition、BE）vol.1-4 に収録されている。

(66) 実は、ウェスレーが教会でない野外で説教を始めたのは、1735 年 10 月 19 日主日に Simmonds という船の上であった。

に教会を閉じたので、既に 1739 年 2 月（17 日）にブリストルで野外説教を行っていたのである。

このような状況の中でブリストルに着き、ホイットフィールドに出会ったウェスレーは国教会が禁じられている野外説教に対して最初は恐れ、迷う心を持っていた。しかし、イエスが山上で説教した確かな前例を想起し、当時貧しくて疎外されていた人々、傷つけられていた多くの人々（炭鉱労働者、農民など）に福音を宣べ伝えるのが神から受けた使命であることを悟るようになり(67)、4 月 2 日凡そ 3 千人の人々に解放と救いの福音を宣べ伝えた(68)。この日からウェスレーは説教する伝道者の生涯を過ごすようになったのである。ウェスレーにとってこの野外説教は福音伝道者としての真の召命（true vocation）を発見すると同時にその範囲や力において他人を超えるメソジスト・リバイバル運動のきっかけとなったのである。勿論、アルダスゲイトの体験がなければ、野外説教もあり得ないが、リバイバル運動の面から見れば、この野外説教は宣教の面においてアルダスゲイトの体験よりもっと決定的な出来事となった。ところが、この野外説教はウェスレー自身にとって好きな宣教の方法ではなかった。彼は 1772 年 9 月 6 日の日誌の中で次のように語っている。「今日に到るまで野外説教は自分にとって十字架である。しかし、私は自分の使命を認識し、すべての人々に福音を宣べ伝える方法はこの方法しかないことを知っている」(69)。つまり、ウェスレーはこの野外説教が宣教のための神の御旨であり、自分に与えられた宣教の使命であることを知り、生涯その道を歩んでいったのである。

ウェスレーは 1739 年から生涯を終える 1791 年まで約 52 年間、馬に乗って伝道する路傍伝道者として毎年平均 800 回を説教し、生涯 4 万回以上の説教を行った。彼は毎年凡そ 5 千マイルを巡回伝道のために旅行し、2 年 1 回はイギリス全土やアイランドを周り、生涯凡そ 20 万マイルの距離を旅行しながら人生の道を失った魂を救うため燃える心を持って福音を宣べ伝える路傍伝道者として生きていたのである(70)。

このように考える時、ウェスレーの生涯は説教者と伝道者の生涯であり、野外説教は本格的なメソジスト福音伝道運動の出発であったと言えよう。

---

(67) Jennings, Theodore W.Jr., *Good News to the Poor : John Wesley's Evangelical Economics*, Nashville: Abingdon Press, 1990. を参照。

(68) BE, v.19, Journal and diaries, p.46（1739 年 4 月 2 日）

(69) BE, v.22, Journal and diaries, p.348（1772 年 9 月 6 日）

(70) 初期ウェスレーの伝記作家である John Hampson はウェスレーの伝道旅行の日記や手紙を徹底的に調査し、彼が旅行した道路の距離を計算し、ウェスレーの旅行距離や説教の回数に関する統計を正確に伝えている。John Hampson, Memoiors of the late Rev. John Wesley, AM, 1791, vol.1, p.98-99. 金振斗『ジョン・ウェスレーの生涯』、図書出版 kmc、2006 年、230-231 頁から再引用。

3.「世界は我が教区」

18 世紀当時の国教会は教区（parish）制度だったため教区に属しないし、教区の司祭や主教（Bishop）の許可がなければ説教することが許されなかった。さらに、礼拝堂の外で説教したり、礼拝を行うことは禁じられていた。

特に、ウェスレーの野外説教を通してリバイバル運動の炎が全国的に広がることに対し国教会と社会はいろいろな反応を示した。既に言及したように、ウェスレーによるメソジスト運動は初めから貧しくて、疎外されていた人々のための福音運動であったので、一般大衆は殆ど積極的に支持し、協力的であったが、国教会の聖職者たちや上流層はそれを反対し、計画的に妨害した。とりわけ彼らはウェスレーが野外説教を行うことによって国教会の規則を違反したと批判したのである。その中で 1739 年 3 月オックスフォードのリンカーン大学の弟子であり、ホーリークラブの会員であったハービー（J. Hervey）がウェスレーに手紙を書いて、教会外において説教を行われているウェスレーの活動に対して強く批判しつつ、そのような行動を中断し、オックスフォード大学に戻って教授生活をするか、それともある教区に属し教会の定住の司祭となることを勧めた。これに対してウェスレーは同じ月の 20 日ハービーに返信を送りながら有名な「宣教の宣言」をする。それは「私は世界を自分の教区と見なしている」(71) という宣言である。勿論、ここでの世界は今日のグローバル時代の地球規模の世界を指していることより、当時の細分化された教区の境界意識を打破し、人々が過ごすところは何処でも宣教の場であることを訴える伝道者としての弁証である。言い換えれば、ウェスレーは福音が必要なところであれば、世界何処でも行って説教することは正しいことであり、まさにそのために神が自分を召して下さったと考えたのである。

ウェスレーはハービーに返信を送ると同時にその手紙の内容を同じ 6 月 11 日の自分の日誌にも引用し、そこで彼は次のように主張している。

「私は信仰あるいは実践のため他の（国教会）規則より聖書の規則に従う。聖書において神は私に自分の力に応じて無知な人々を教え、不法の人々を改心させ、有徳の人々を強めることを命じておられる。現在のところ、またたぶんこれからもそうであろうが、私は自分の教区を持っていないからである。一体、私は誰の言う事を聞かねばならないのか、神の言われることか、それとも人の言う事か？もし私が神より人の言う事に従えば、裁かれるであろう。福音の使命は私に委ねられており、福音を宣べ伝えなければ、私は不幸な者になるので、私は福音を宣べ伝えるためヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカなど福音を伝えるところであれば、何処でも行ける。…私

(71) Telford. John, ed.,*The letters of the Rev. John Wesley*, Standard Edition, vol.1, London : The Epworth Press, 1931, p.286.

は、全世界を自分の教区として見なしている。…救いの喜びお知らせを聞くことが出来るようにすべての人々に伝えるべきであり、これこそ神が自分を呼ばれた働きを知ることである。」(72)

ここで、ウェスレーは聖書の原則と宣教の使命を強調しながらすべての世界を自分の宣教の教区として考えたのである。言い換えれば、ウェスレーは福音の良きお知らせを聞く必要があり、聞きたい人がいるところがあれば、世界何処でも行って説教すべきであり、まさに神はそのために自分を召して下さったと告白しているのである。

「私は、全世界を自分の教区として見なしている」、つまり「世界は我が教区」というウェスレーの宣言はメソジスト宣教の歴史において一番有名なスローガンとなり、彼の霊性が宣教に繋がる動機となったと言えよう。

Ⅳ．結び

これまで宣教のわざとしてのウェスレーの霊性について考察してみた。ウェスレーにとって霊性は 17 世紀に起こったドイツの敬虔主義に影響され、敬虔主義が主に主張する個人の魂だけでなく、社会全体が救われ、神の像を回復することであり、私たちはそのウェスレーの霊性の核心である救いの確証、そしてキリスト者の完全の中身である神の愛と隣人愛を実践しながら宣教において社会的使命を持つことになる。これこそ宣教に対するウェスレーの霊性の重要な特徴である。ウェスレーの霊性は実践的な宣教の霊性として福音的であり、体験的である。彼はアルダスゲイトの体験によって福音的な回心をし、救いの確信を持って当時疎外されている人々に野外説教を通して宣教の使命を果たした。特に、彼は「世界は我が教区」というスローガンを持って地の果てまで主の証人となったのである。

宣教のわざとしてウェスレーの霊性と彼の思想は次のように要約することが出来る。第 1 に、宣教のわざとしてウェスレーの霊性の中心は人や社会を救って行く救済論である。すなわち、福音伝道者としてウェスレーはキリスト教信仰の目的を救いに置き、その救いは個人に留まらず、社会、世界、人類全体まで及ぶのである。第 2 に、宣教のわざとしてのウェスレーの霊性は個人と社会、内的なものと外的なものを分離しないことであり、その目的は福音を宣べ伝える宣教である。特に、彼の説教は「世界は我が教区」という宣教の情熱から出てきたものとして、メソジスト・リバイバル運動の動機と原動力となったのである。第 3 に、このような宣教のわざとしてのウェスレーによる霊性の次元は、先行の恵みによる聖霊の働きの普遍性を強調するた

（72）BE, v.19, Journal and diaries, p.67.（1739 年 6 月 11 日）

め今日において包括的な宣教の理解を示すものであり、とりわけ彼の社会的霊性による宣教の使命は現代の宣教の課題として直面しているもの、例えば人権や貧困の問題、女性の権利、環境の問題、多元主義の挑戦として宗教間の対話など多様な諸課題[(73)] を解決するための一つの示唆を与えていると言えよう。

（73）Theodore Runyon, *The New Creation* : John Wesley's theology today, Nashville : New York : Abingdon Press, 1998.（特に、著者が主張しているように、6 章（Wesley for today）を中心に参照）。